

特別支援学校教育実習指導の指導内容の検討 — 教育実習日誌の記述から —

今野 邦彦¹ 原田 公人¹ 矢野 潤²

Examination of Instruction Contents of Guidance for Teacher Training at Special-Needs School -From the Description in the Teaching Practice Diary-

Kunihiko KONNO¹, Kimihito HARADA¹, Jun YANO²

Abstract

The purpose of this study is to clarify issues with pre- and post-guidance for teacher training provided by this university. We focused on teacher training diary filled out by student teachers to examine their experiences at the host schools and the guidance and advice they received from their supervisors.

Three faculty members of the university in charge of teacher training at special needs schools examined student teachers' entries for two of the sections in their teacher training diary: the Observations, Considerations, and Reflections section and the Guidance and Advice from Their Supervisors section. The faculty members then categorized those entries on the basis of their consensus. As a result, matters considered important in guidance for teacher training were divided into six categories: verbal communication with children and teachers, study of teaching materials, written and verbal language skills, demonstration classes, educational guidance, and noncurricular guidance and understanding children.

The faculty members also examined issues with guidance for teacher training, matters to be aware of when providing guidance to students, and viewpoints from which guidance for teacher training is provided. As a result, the following were listed for pre-guidance for teacher training: understanding of the actual situation and disabilities, information about the host schools, words and expressions, classes, teaching materials, mental preparedness, guidance on how to fill out teacher training diary, self-reliance activities, evaluation, information about special needs education, online classes and demonstration lessons, teaching plans, support for guardians, and *seikatsutangen gakushu* (life unit learning). The matters to be provided by host schools were: explanation about classes and activities as well as guidance and advice, information necessary to grasp actual conditions at the host school, and support for guardians. Further, matters for post-guidance for teacher training, future tasks, and areas for collaboration were identified.

As ways to enhance the teacher training experience of student teachers, we examined teacher training diary, groupwork, preparation of self-evaluation sheets, and collaboration with supervisors.

所属:

¹ 藤女子大学人間生活学部子ども教育学科・保育学科

² 藤女子大学人間生活学部子ども教育学科・保育学科 非常勤講師

Department of Child Education, Faculty of Human Life Science, Fuji Women's University

はじめに

教育実習は、学校の教員を志す大学生にとって、実習期間の長短はあるが、実際に教育現場で幼児児童生徒を指導する経験として貴重である。教育実習は指導教員の指導（批評や助言）のもと、子どもたちと活動を共にし、学校教育活動に実践的に関わることで学びを深めていく。

法令等では、教育実習の内容について特に定められておらず、その内容は教育委員会や実習受け入れ校により決定されているため、実習内容が異なる。しかし、多くの場合、教育実習は、実習受け入れ校の教育活動のほぼすべての領域に参加する。

主な教育実習の内容として、以下の事項がある。

- ① 説明、講話：校長、生徒指導・進路指導・教務などの担当者から学校の教育活動の実際についての説明、講話
- ② 学級活動・ホームルーム活動：学級担任とともに朝、帰りの学級活動・ホームルーム活動や給食、清掃などの指導
- ③ 授業参観：指導教員の指導のもとに授業の見学
- ④ 教材研究：指導教員の指導のもと、実習で担当する授業の教材研究、学習指導案の作成、その他必要な授業の準備
- ⑤ 教科指導：指導教員の指導のもと、実際の授業や教材作成等の準備
- ⑥ 研究授業：教育実習の授業公開
- ⑦ 研究授業反省会：研究授業を見学した教員の指導・助言
- ⑧ 校務：指導教員の指示のもとに、学校運営上の事務・作業
- ⑨ 課外活動や部活動、学校行事等における幼児児童生徒の指導

なお、法令上、教科指導は取得しようとする免許状の教科に限られているわけではないが、特別支援学校の教育実習の場合であっても、上記した内容のほぼすべてを短期間で経験することになる。このため、教育実習の成果を得るためには、受け入れ校での指導と並行し、大学での実習指導（事前・事後）が重要である。

本学においては、教育実習生が経験する上記の教育活動を踏まえ、特別支援学校教育実習指導として、事前・事後指導を行っているが、教員養成の質的向上が求められている今日、在学時における本指導の一層の充実が求められる。

1. 研究の背景

本学保育学科では、これまで幼稚園教諭一種免許状を基礎免許状として、特別支援学校教諭一種免許状の取得が可能であった。2020年度は「保育学科」から「子ども教育学科」の学科改編に伴い、同年度に入学した子ども教育学科の第1期生からは、小学校教諭一種免許状を基礎免許状とする学生も特別支援学校教諭免許状を取得することとなり、卒業後に特別支援教育の教育現場で実践を行うことが可能となった。

本学科における教育実習指導は、従来の実習科目である「障害児教育実習」には事前指導・事後指導が教育課程に位置づいておらず、学生の講義の空き時間を調整して時間を設定し指導を行ってきた。しかし、2018年度入学生からは新カリキュラムとなり、「教育実習指導（特別支援）」として、1単位15コマが授業時間として位置づけられた。

2021年度から開講した「教育実習指導（特別支援）」では、授業のねらいとして「教育実習（特別支援）の意義・目的・実際について理解すること」を挙げ、事前指導では、実習受け入れ校の概要、幼児児童生徒の実態に基づいた学習指導案の作成ができること、事後指導では、教育実習を振り返り、その成果と課題をまとめられることを目標として授業を進めた。

2020年は世界的に新型コロナウイルス感染症が波及し、文部科学省は2020年5月、教育実習期間の3分の1までは大学内での実習や授業で代替できると通知を発出した。その後、同年8月、文部科学省は、大学の授業などを教育実習の代わりとして単位認定することを認める特例措置を発表した。こうした動向を踏ま

え、本学での対応としては、実習中止者に対する特例措置としての学内実習の計画、教育実習の最低日数の見直し、事前指導の一部オンライン化等を実施した。更に、新型コロナウイルス感染症は一過性のものではなく、今後も継続するものと捉えるべきであるとした。

今野・原田・矢野（2021）は、2020年度の本学学生の特別支援学校教育実習にかかわる変更事項として、実習日程の変更、実習期間の短縮、事前指導（オリエンテーション）方法の変更、学習指導案様式の変更、健康チェックの徹底等を探り上げた。

今野・原田・矢野（2022）では、新規開講となった「教育実習指導（特別支援）」について、学内実習の改善、教育実習受け入れ校との連携・協力、オンライン実習の検証等、ウィズコロナ時代における特別支援学校教育実習指導の課題を挙げた。この中で「特別支援学校教育実習指導の改善に向けた基本的姿勢（指導内容）」として、①実態把握（子ども・障害理解）、②指導面（指導教員等の授業観察の意義と方法、教材研究の方法、基本的な指導技術・指導法、指導案作成・授業実践）、③学校生活指導（社会人・教員としての心得、実習態度、学級会活動・清掃などの指導と方法、学級経営、教育実習日誌作成）等を挙げた。

これらの課題に対して、例えば、基本的な障害理解・指導技術・指導法や学習指導案の作成方法は、事前学習でも指導可能である。また、学校現場で幼児児童生徒に接して実態把握をした上での授業実践は、大学教員と実習指導教員との綿密なコミュニケーションなくしては成立しないものである。しかし、全教育機関における新型コロナウイルス感染症対策のため、実習受け入れ校への直接訪問による指導教員や教育実習生からの情報収集の機会が激減を余儀なくされた。特に、教育実習生が教育実習中に経験したこと、実習指導教員の指導とその成果、教育実習生の成長、課題などは把握しづらく、これらを大学での指導にフィードバックするのが難しい状況となった。特に、教育実習日誌作成に関しては、基本的に実習生が全て記載することになっている。そこで、実習指導教員からの指導・助言に対する実習生の理解の程度や提示される課題に対する問題解決の意識等について、大学では確認できにくい状況があり、事前・事後指導の課題になっている。

以上のように、教育実習は、実習受け入れ校と大学との連携協働が求められるが、新型コロナウイルス感染症による社会変化にも対応しつつ、大学における事前・事後の教育実習指導を充実することが、教育実習生にとって意義のある経験の一助となると考える。

2. 目的

教育実習生が教育実習期間中に記述した教育実習日誌に着目し、実習校における教育実習生の活動内容や指導教員による指導・助言を調査し、本学における教育実習指導の事前・事後指導の課題を明らかにする。

3. 調査対象・調査内容

2021年度に特別支援学校教育実習を履修した本学科卒業生に対して、教育実習日誌の借用を依頼し、教育実習内容（教育実習生による反省、指導教員による指導・助言）を検討した。教育実習日誌の借用は、対象者31名中、19名から同意が得られた。

教育実習日誌調査の対象となった教育実習生の特別支援学校種別は知的障害10名、肢体不自由7名、病弱1名、聴覚障害1名（計19名）であった。Table 1に、教育実習日誌を借用した教育実習生の実習先（学校種）及び実習期間を示す。

2021年度は、各特別支援学校では、新型コロナウイルス感染症対策の一環として、実習期間は通常時よりも1週間ほど短縮された。また、2校ではオンライン実習での実習を余儀なくされた。このため、本学では学内実習として、模擬授業、講義の補講を行った。

Table 1 教育実習生の実習先（学校種）及び実習期間

N=19

| | 学校種 | 実習期間(w:週) | 学校種 | 実習期間 |
|----|------|-------------------------|-----|-------------------------------|
| 1 | 知的障害 | 2021/06/29-07/16 (2.5w) | 11 | 肢体不自由 2021/06/28-07/09 (2w) |
| 2 | 知的障害 | 2021/06/29-07/16 (2.5w) | 12 | 肢体不自由 2021/06/28-07/9 (2w) |
| 3 | 知的障害 | 2021/09/06-09/24 (3w) | 13 | 肢体不自由 2021/08/23-08/27 (1w) * |
| 4 | 知的障害 | 2021/10/11-10/22 (2w) | 14 | 肢体不自由 2021/10/25-11/10 (2.5w) |
| 5 | 知的障害 | 2021/10/11-10/22 (2w) | 15 | 肢体不自由 2021/10/29-11/05 (2.5w) |
| 6 | 知的障害 | 2021/11/09-11/26 (2.5w) | 16 | 肢体不自由 2021/10/29-11/05 (1w) * |
| 7 | 知的障害 | 2021/11/16-12/7 (3w) | 17 | 肢体不自由 2021/11/08-11/19 (2w) |
| 8 | 知的障害 | 2021/11/22-12/3 (2w) | 18 | 病弱 2021/11/08-11/19 (2w) |
| 9 | 知的障害 | 2021/11/22-12/10 (3w) | 19 | 聴覚障害 2021/11/15-12/03 (2.5w) |
| 10 | 知的障害 | 2021/11/29-12/10 (2w) | — | — |

* オンライン実習

調査期間は、2022年6月～11月

4. 方法

4-1 記述内容のCategory化

本学科特別支援学校教育実習担当者（以下 担当者と記す）3名が、教育実習日誌（19名分）の中から、教育実習生が記述した「観察・考察・反省（自己のふりかえりなど）」、「指導教員からの指導・助言」欄の記述内容（趣旨）を検討し、担当者3名の合議の基に、Category化する。

4-2 Key word抽出及び数値化

- ・担当者3名が、各々、対象者全員の教育実習日誌から、関連が深いと考える記述（Key word）を抽出する。
- ・抽出した記述について、担当者3名の合意を得たものをCategory毎に分類する。
- ・各Categoryに分類した記述（Key word）を集計する。

4-3 After codingによる教育実習指導の課題、指導で意識すべき事項

担当者3名が、教育実習日誌における教育実習生による「観察・考察・反省（自己のふりかえりなど）」及び、「指導教員からの指導・助言」欄の記述内容から、それぞれ「教育実習指導の課題、指導で意識すべき事項」と考えた事項を欄に記述する。これらの記述事項をDescriptionとしてAfter codingする。

5. 結果とまとめ

5-1 記述内容のCategory化

まず、担当者3名が、各々、対象者全員の教育実習日誌から、関連が深いと考える記述（Key word）を抽出した。次に、抽出した記述について、担当者3名の合意を得たものをCategoryとして分類を試みた。その結果、6 Category（「子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け」、「教材研究 教材教具・ICT」、「文章表現・言葉遣い」、「研究授業」、「学習指導 発問・各教科と自立活動」、「生活指導 子ども理解」）が生成された。具体的には、「児童が自分で考えて行動できるように言葉掛けを意識する」の記述は「言葉掛け」を「コミュニケーション」との関連が深いKey wordとしてCategory A「子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け」にカウントした。また、「紙と糊で作業をする場面では、紙を貼る部分を枠組みしておく、児童に分かりやすい」の記述は、「紙と糊で作業」との関連が深いKey wordとしてCategory B「教材研究 教材教具・ICT」にカウントした。上記の手法を全て（19名分）の教育実習日誌に対して適用した。

Table 5-1に、Categoryとその記述例を示す。

Table 5-1 Category及び教育実習日誌の記述例

| Category | 教育実習日誌の記述例（原文） |
|--------------------------|--|
| A 子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け | <ul style="list-style-type: none"> ・児童が自分で考えて行動できるように言葉掛けを意識する ・児童の目を常に見て、コミュニケーションをとりながら活動することが、どの場面でも大切である |
| B 教材研究 教材教具・ICT | <ul style="list-style-type: none"> ・紙と糊で作業をする場面では、紙を貼る部分を枠組みしておく、児童に分かりやすい ・同じ教材でも使うタイミングや見せ方で、児童の興味が変わってくる ・iPadで動画を見ながら手を洗うことが難しい児童もいた |
| C 文章表現・言葉遣い | <ul style="list-style-type: none"> ・児童がわかるような簡単でわかりやすい言葉が大事 ・「あれ」「これ」「それ」など曖昧な表現は避け、具体的に伝える |
| D 研究授業 | <ul style="list-style-type: none"> ・反省会では、自分では、気が付くことができなかった子どもたちの姿に気づくことができた ・他の教育実習の研究授業を見学し、反省会に出席することで、自分の授業をどのように組み立てたらよいかのアイデアや工夫が出てきて良い機会となった |
| E 学習指導 発問・各教科と自立活動 | <ul style="list-style-type: none"> ・児童の理解度によって、質問の仕方を変えるなどして、理解を深める ・自立活動、生活単元学習の内容やねらいを教えていただいた ・作業学習：1度やっている工程の確認では、先生が説明するだけでなく、生徒に問いかけたり、答えてもらうことで、学びをフィードバックでき、知識として定着する |
| F 生活指導 子ども理解 | <ul style="list-style-type: none"> ・朝、パニックになった子が多く、対応の難しさを感じた ・給食指導では、全体を見渡すことを心掛ける ・食事の様子からも感覚機能の状態を知ることができることを学んだ |

5-2 Key word抽出及び数値化

生成された6 Categoryに示された中からKey wordを抽出し、集計した。

Table 5-2-1に各Categoryに集計したKey wordの結果、Table 5-2-2に各Categoryの合計 (%) を示す。なお、実習生はそれぞれ実習期間や記述量に差があることから、数値の解釈に留意する必要がある。

Table 5-2-1 各CategoryのKey wordの集計結果

| ※ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 計 |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| A | 5 | 4 | 9 | 10 | 6 | 12 | 23 | 17 | 15 | 8 | 9 | 1 | 1 | 1 | 9 | 12 | 8 | 6 | 13 | 169 |
| B | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 3 | 5 | 10 | 4 | 3 | 2 | 1 | 2 | 2 | 1 | 3 | 5 | 6 | 13 | 67 |
| C | | 1 | 2 | | 2 | | | 1 | 3 | | 1 | 2 | 2 | 2 | | | | 1 | 4 | 21 |
| D | 2 | 1 | 1 | | 1 | 4 | | 4 | | 1 | 1 | | | | 1 | | 1 | | 4 | 21 |
| E | 17 | 18 | 3 | 11 | 6 | 7 | 21 | 14 | 15 | 13 | 7 | 3 | 7 | 5 | 11 | 5 | 3 | 16 | 8 | 190 |
| F | 4 | 12 | 8 | 8 | 6 | 9 | 14 | 13 | 9 | 6 | 7 | 3 | 2 | 3 | 6 | 3 | 8 | 3 | 1 | 125 |
| 計 | 29 | 38 | 24 | 31 | 22 | 35 | 63 | 59 | 46 | 31 | 27 | 10 | 14 | 13 | 28 | 23 | 25 | 32 | 43 | 593 |

※註1) 番号は、実習生の実習校 (1～10：知的障害特別支援学校、11～17：肢体不自由特別支援学校、18：病弱特別支援学校、19：聴覚特別支援学校)

※註2) Category A：子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け、B：教材研究 教材教具・ICT、C：文書表現・言葉遣い、D：研究授業、E：学習指導 発問・各教科と自立活動、F：生活指導 子ども理解

Table 5-2-2、Figure 2に、各Categoryの合計 (%) を示す。Category E「学習指導 発問・各教科と自立活動」が、190 (32.0%)、次いで、Category A「子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け」が169 (28.5%)、Category F「生活指導 子ども理解」が125 (21.1%)、Category B「教材研究 教材教具・ICT」が67 (11.3%)、Category C「文書表現・言葉遣い」とCategory D「研究授業」が、それぞれ21 (3.5%) と続いた。

学習指導、コミュニケーション、子ども理解の記述内容の割合が多いのは、特別支援学校、障害のある幼児児童生徒の特性を踏まえているためと考えられる。

Table 5-2-2 各Categoryの合計結果 (%)

| Category | 計(%) |
|---------------------------|------------|
| A: 子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け | 169 (28.5) |
| B: 教材研究 教材教具・ICT | 67 (11.3) |
| C: 文章表現・言葉遣い | 21 (3.5) |
| D: 研究授業 | 21 (3.5) |
| E: 学習指導 発問・各教科と自立活動 | 190 (32.0) |
| F: 生活指導 子ども理解 | 125 (21.1) |
| 計 | 593 (100) |

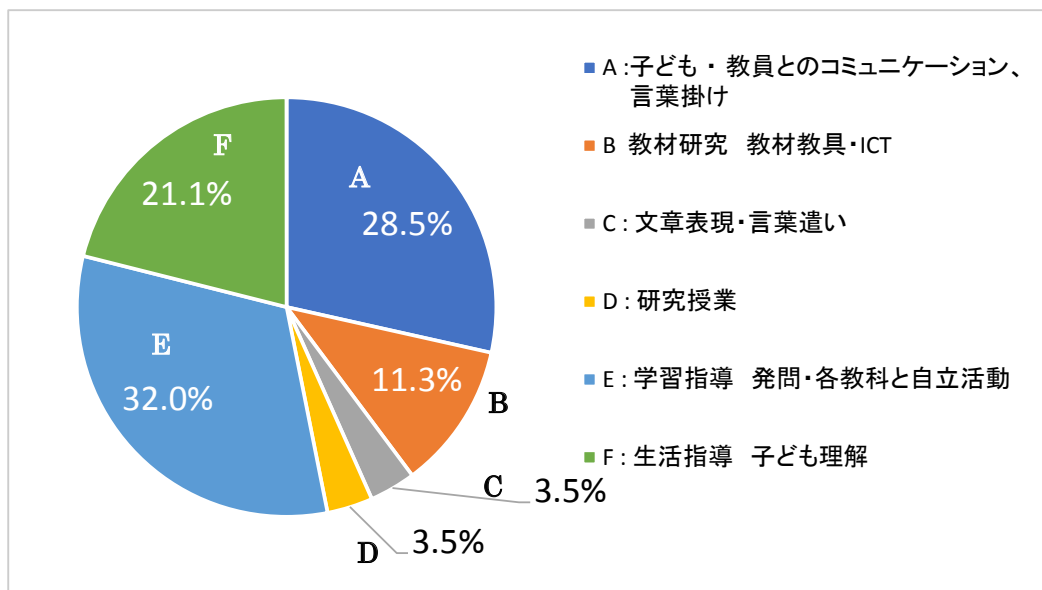


Figure 2 各Categoryの合計結果 (%)

Table 5-2-3に、Categoryに集計した全実習生の個別の集計結果（四捨五入：％）を示す。記述内容が40％以上あるCategoryと人数をみると、Category E「学習指導 発問・各教科と自立活動（5名）、及びCategory A「子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け（1名）」であった。

さらに、記述内容が30.0％以上あるCategoryと人数をみると、Category A「子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け（10名）」、Category E「学習指導 発問・各教科と自立活動（11名）」、Category F「生活指導 子ども理解（4名）」、Category B「教材研究 教材教具・ICT（1名）」であった。

このことから、個々の実習生の教育実習日誌は、「子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け」、「学習指導 発問・各教科と自立活動」、「生活指導 子ども理解」を主たる中心として記述されているものと捉えることができよう。

Table 5-2-3 全実習生の個別の集計結果（四捨五入：％）

| ※ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| A | 17 | 11 | 38 | 32 | 27 | 34 | 37 | 29 | 33 | 26 | 33 | 10 | 7 | 8 | 32 | 52 | 32 | 19 | 30 |
| B | 3 | 5 | 4 | 6 | 5 | 9 | 8 | 17 | 9 | 10 | 7 | 10 | 14 | 15 | 4 | 13 | 20 | 19 | 30 |
| C | 0 | 3 | 8 | 0 | 9 | 0 | 0 | 2 | 7 | 0 | 4 | 20 | 14 | 15 | 0 | 0 | 0 | 3 | 9 |
| D | 7 | 3 | 4 | 0 | 5 | 11 | 0 | 7 | 0 | 3 | 4 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 4 | 0 | 9 |
| E | 59 | 47 | 13 | 35 | 27 | 20 | 33 | 24 | 33 | 42 | 26 | 30 | 50 | 38 | 39 | 22 | 12 | 50 | 19 |
| F | 14 | 32 | 33 | 26 | 27 | 26 | 22 | 22 | 20 | 19 | 26 | 30 | 14 | 23 | 21 | 13 | 32 | 9 | 2 |

※註1) 番号は、実習生の実習校（1～10：知的障害特別支援学校、11～17：肢体不自由特別支援学校、18：病弱特別支援学校、19：聴覚特別支援学校）

※註2) Category A：子ども・教員とのコミュニケーション、言葉掛け、B：教材研究 教材教具・ICT、C：文章表現・言葉遣い、D：研究授業、E：学習指導 発問・各教科と自立活動、F：生活指導 子ども理解

5-3 After codingによる教育実習指導の課題、指導で意識すべき事項

担当者3名は、教育実習日誌の「観察・考察・反省（自己のふりかえりなど）」及び、「指導教員からの指導・助言」欄から、教育実習指導の課題、指導で意識すべき内容であると考えた記述（※description）を抽出し、検討事項として挙げた。（「指導教員からの指導・助言」は、教育実習生の指導教員からの聞き取りによる記述）

（※注 以下、「観察・考察・反省」、「指導教員からの指導・助言」、「教育実習指導の課題、意識すべき事項」に示された記述をdescriptionと記す）

Table 5-3-1に、その例（一部抜粋）を示す。「観察・考察・反省」欄と「指導教員からの指導・助言」欄は、教育実習生の任意による記述であるため、整合性のない部分が多いが、担当者は、両方もしくは何れかの記述に着目し、「教育実習指導の課題、意識すべき事項」欄に加筆した。

また、担当者3名は同席し合意形成した上での記述ではなく、教育実習日誌を回覧し、各担当者の見解として加筆したもので、内容の重複がある。これらの重複部分は、今後の事前・事後指導に反映すべき事項として共有した。例を挙げると、表中、「※給食はバランスよく食べられるように言葉掛けをする。」の記述に対して、担当者は、事前指導において、給食指導について十分触れていなかったとの反省のもとに、教育実習指導の課題、意識すべき事項欄に「給食指導について基本的な考え方を指導する必要がある。」と記した。

Table 5-3-1 教育実習指導の課題、指導で意識すべき事項（一部抜粋）

| 観察・考察・反省 | 指導教員からの指導・助言 | 教育実習指導の課題、意識すべき事項 |
|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・実態把握が十分できていない。個人差に対応した授業を考える。 ・児童により使用する教材が異なる、これに応じた言葉掛けを意識する。 ・児童の行動の背景（理由）を考える。 ・学習内容に興味を持たせるために、絵や文字カード、身振りを活用する。 ・否定的な言葉を使わない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・課題学習では、教材提示により、できることを増やす。 ・※給食はバランスよく食べられるように言葉掛けをする。 ・話し手に注視させる。視線を合わせる。 ・危険なことは確実に伝える。 ・トラブルになりそうな児童がいる場合は、意識的に離れて活動するように促す。 ・落ち着きがない児童に対し、状況に応じて、パーテーションで視界を遮ったり、落ち着いて活動できる時間を少しずつ増やす。 | <ul style="list-style-type: none"> ・給食指導について基本的な考え方を指導する必要がある。 ・絵や文字カード、身振りを活用する意図について指導する必要がある。 ・トラブルになりそうな児童をどのように判断するか指導する必要がある。 ・落ち着きがない児童に対し、パーテーションで視界を遮る判断について、指導する必要がある。 ・遊びの指導（合同指導）について、指導教員のコメントがない。 ・具体的な言葉掛けの例を指導する必要がある。 ・擬音語（オノマトペ）を用いた言葉掛けを指導する必要がある。 ・TTのねらいについて指導する必要がある。 ・「児童の肩をトントンして気づかせる。」の意味？ |
| <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの指導では、待っている児童への指導も重要である。 ・児童が自分で考えて行動できるように言葉掛けを意識する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・声が届きにくい児童に対して、早めに言葉掛けをする。 ・ジェスチャーや擬音語 ・経験が少ない児童に対して事前・事後指導も大切。 ・指導者の立ち位置：教師間の連携やそれぞれの位置での対応法を知っておく。 ・MT：ジェスチャー、児童の肩をトントンして気づかせる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・TTのねらいについて指導する必要がある。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業研究：教材の評価、表情、ジェスチャーを意識する ・児童の実態や目標が分からないと、支援方法も見えてこない。 ・授業後の振り返りや評価が大切。 | <ul style="list-style-type: none"> ・経験が少ない児童に対して事前・事後指導も大切。 ・指導者の立ち位置：教師間の連携やそれぞれの位置での対応法を知っておく。 ・MT：ジェスチャー、児童の肩をトントンして気づかせる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・TTのねらいについて指導する必要がある。 |

| | | |
|--|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・児童の状況や環境等に合わせて、臨機応変に対応する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・児童の目標から優先させることを考える。 ・児童にどうさせたいかを見通して、あえて様子を見ることも必要。 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの行動の意味、意図の理解について指導する。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・児童個人の中でも、日内で活動の速さ、動きに差がある。 ・席を立つ児童がいて、着席を促すことが難しかったが、トイレに行きかけた可能性がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・トイレに行きたくても言わない児童もいるので、普段の様子を見て判断する。 ・給食指導では、全体を見渡すことを心掛ける。 | <ul style="list-style-type: none"> ・給食での事故の事例に基づき、注意すべきことを指導する。 ・集団での遊びの指導における、「順番を待っている児童」「見ている児童」への働きかけについて指導する。 ・児童の活動を促す言葉がけについて指導する。 ・児童の意欲を引き出す言葉がけについて指導する。 ・教材制作と子どもに合わせた工夫について指導する。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの指導では、待っている児童への指導も大切。 ・児童が自分で考えて行動できるような言葉がけを意識する。 ・児童の意欲を引き出す言葉がけが難しい。 ・さらに児童に適した教材を工夫したい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・教材は、何度も難易度を変えるなど、スモールステップを踏むことが大切。 ・体験学習や行事では、事前・事後学習も大切。 ・指導案における立ち位置や教師間連携について把握する必要がある。 ・すぐに言葉がけをするのではなく、様子を見る必要がある場合もある。 ・すぐに実践に移し、実践してみてもうだったのか。更に良い方法は、ないかなど、様々な方法を探っていくことで、スピード感を持って解決に向かうことができる。 ・綿密な計画と子どもに対する分析、それに対応した指導方法や教材があったため、子どもたちも信頼して意欲をもって学習に取り組んでいた。 ・体験学習や行事は、事前、事後学習が大切。事前学習で、見通しを持ったり、事後学習で振り返りをしたり、楽しかったことや頑張ったことを発表する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・指導案における「配置図」や、MTとSTの連携について指導する。 ・言葉がけのタイミングについて指導する。 ・子どもへのコミュニケーションの取り方の指導。言葉、ジェスチャーとの併用。否定的な言葉ではなく、やる気を出させる言葉。いろいろな伝え方の指導。 ・目標を達成するためには、いくつもの小さな目標を作り、少しずつ成長できるように。 ・スモールステップについての指導が必要。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・授業づくりにおいて「実態把握」がどれほど重要なかを実感した。 ・言葉かけの際には、直接的な言葉や否定語よりも、次につながるような言葉や児童が自分で考えて行動できるような言葉を用いることを意識する。 ・児童が何を考えているのか、実習生の言葉がどれくらい伝わっているのかわからないが多かったが、毎日、少しずつ、児童の気持ちや実習生の言葉が届いていると分かることが増えていったように思う。 | | |

Table 5-3-2に、「観察・考察・反省」、「指導教員からの指導・助言」、「教育実習指導の課題、意識すべき事項」に挙げられた記述総数（description数）を示す。

教育実習期間に差があるが、「観察・考察・反省」は、252 description（実習生一人当たり、平均13 description）、「指導教員からの指導・助言」は、330 description（同平均17 description）に対して、担当者からは、教育実習指導の課題、意識すべき事項を250 description挙げられた。なお、各項の数が一致していない理由は、教育実習指導の課題、意識すべき事項として、「観察・考察・反省」及び「指導教員からの指導・助言」の一方または両方から挙げられた事項として記載されているためである。

Table 5-3-2 「観察・考察・反省」、「指導教員からの指導・助言」、「教育実習指導の課題、意識すべき事項」記述 (description) 数 (N=834)

| 観察・考察・反省 | 指導教員からの「指導・助言」 | 教育実習指導の課題、意識すべき事項 |
|----------|----------------|-------------------|
| 254 | 330 | 250 |

担当者3名より挙げられた「教育実習指導の課題、意識すべき事項」250 descriptionについて、After codingにより、今後の事前・事後指導（実習校の障害種別に対応した指導）や次年度以降の特別支援教育科目の授業との関連等を検討する際に重要と思われる視点や内容を得ることとした。なお、250 descriptionから、内容が重複していると判断した13 description除いた237 descriptionを分析対象とした。

Figure 3に、After codingにより、第1次codingした237 descriptionずつcodingした結果を示す。第1次codingでは、事前指導(161)、実習校指導(62)、事後指導・今後の検討課題・連携 (14)の3 codeが生成された。Figure 3中、事前指導とは、大学での特別支援学校教育実習での指導事項、実習校指導とは教育実習校において指導を受けるべき事項、事後指導とは大学で新たに事後指導として取り入れるべき事項、今後の検討課題・連携とは実習指導全体を通して検討すべき事項である。

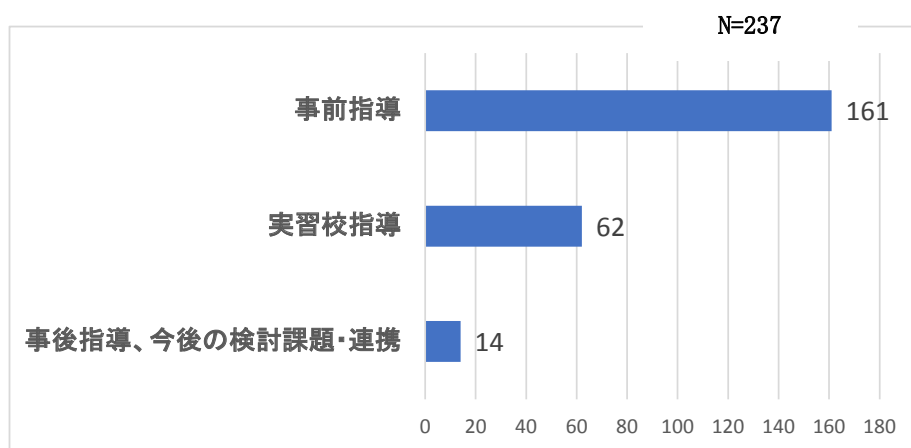


Figure 3 第1次coding

事前指導（161）にcodingしたdescriptionとしては、「教材制作と子どもに合わせた工夫について指導する」「低学年のコミュニケーション方法を具体例を示し、指導する必要がある」「遊びの指導について、事前指導において十分理解させる必要がある」「児童生徒にとって理解しやすい質問の仕方、またその反応への対応の仕方を指導する」「iPad、ホワイトボード、黒板、等の教材の提示方法についての指導が必要である」「特別支援学校の環境設定（物理的な）から、合理的配慮の考え方について、説明する必要がある」等がある。

また、実習校指導（62）にcodingしたdescriptionとしては、「発語と言語理解にギャップがある」の具体的な内容と改善策について事例を通した指導が必要」「将来の就職や進路を見据える観点や原則の指導が必要」「授業参観では、子どもの実態に関する情報を、参観前・時に伝えていただきたい」等がある。

事前指導及び実習校指導については、それぞれ161、62とdescription数が多いため、第2次codingした。Figure 4に、第2次coding（事前指導）の結果を示す。

第2次coding（事前指導）では14 code（実態把握・障害理解（38）、学校情報（35）、言葉（24）、授

業 (13)、教材 (9)、心構え (9)、実習日誌記入指導 (6)、自立活動 (6)、評価 (6)、特別支援教育情報 (5)、オンライン授業・模擬授業 (4)、指導案 (3)、保護者支援 (2)、生活単元学習 (1) が生成された。

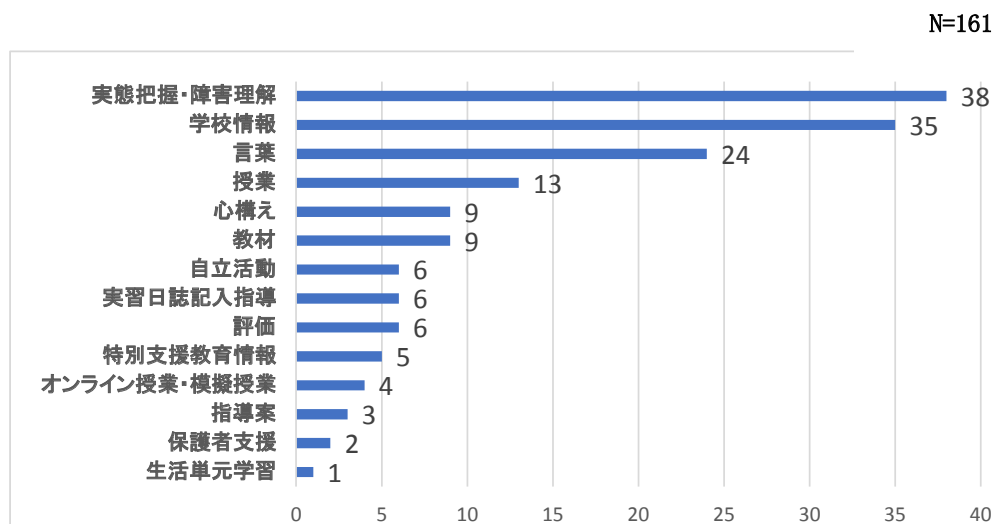


Figure 4 第2次coding (事前指導)

Table 5に、事前指導として生成された14 codeのdescriptionの具体例を示す。

Table 5 事前指導 (14 code) のdescription例

| 事前指導 (14 code) | description例 |
|----------------|-------------------------------------|
| 実態把握・障害理解 | 子どもの行動の意味、意図の理解について指導する。 |
| 学校情報 | 学校の全体 (一日の流れ) について、詳しく指導する必要がある。 |
| 言葉 | 児童の意欲を引き出す言葉がけについて指導する。 |
| 授業 | 子どもの実態に合わせた発問の方法についての指導が必要。 |
| 教材 | 教材を使う活動での工夫について指導する。 |
| 心構え | 教師の責任について指導する。 |
| 実習日誌記入指導 | 指導教員以外の職員の助言等も、できる限り日誌に記載することを奨励する。 |
| 自立活動 | 自立活動と授業との関連について、具体的に説明する。 |
| 評価 | 目標と評価の関連性、具体的な評価方法。 |
| 特別支援教育情報 | 特別支援教育におけるICTの活用について指導する。 |
| オンライン授業・模擬授業 | 教材の重要性を知るためには、模擬授業は有効。 |
| 指導案 | 学習指導案における基本的な文章表現について指導する。 |
| 保護者支援 | 保護者対応についての指導する必要がある。 |
| 生活単元学習 | 生活単元学習のねらい・指導内容について、指導する必要がある。 |

Figure 6に、第2次coding（実習校指導）の結果を示す。第2次coding（実習校指導）では4 code（授業・活動の説明（28）、指導・助言の説明（22）、実態把握（10）、保護者支援（2））が生成された。

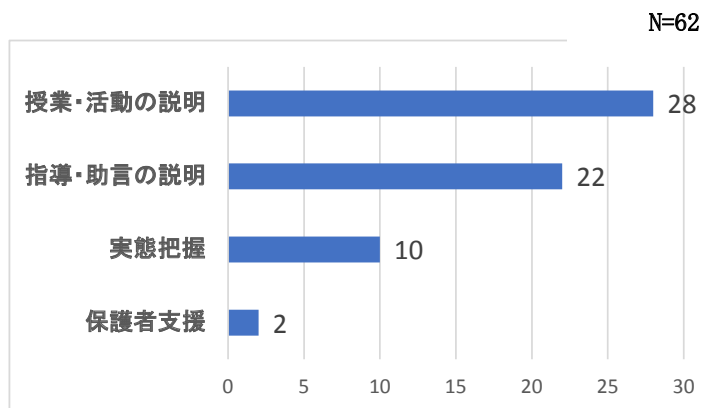


Figure 6 第2次coding（実習校指導）

Table 7に、実習校指導として生成された codeのdescriptionの具体例を示す。

Table 7 実習校指導（code）のdescription例

| 実習校指導（4 code） | description例 |
|---------------|--|
| 授業・活動の説明 | <ul style="list-style-type: none"> ・教材の配置、動線について指導する。 ・チームティーチングの実際、具体的なやりとりについて指導する。 ・実習生の記録に「学習の意欲づけについて選択肢を用意する方法もある」について、詳しい説明が必要。 |
| 指導・助言の説明 | <ul style="list-style-type: none"> ・指導学級の担任の指導方針について、理解して、実習を受ける。 ・指導教員は、実習生に考えるべき課題を与えている。 ・研究授業は実習生の主体性を重視しつつも、それまでの実習での課題解決を意識した授業展開についてアドバイスする。 |
| 実態把握 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒に理解してもらうためには、色々な方法で対応することが大切。 ・言葉だけでなく見本を見せる等。視覚、聴覚のどちらが優位なのか、色々な生徒がいることを理解する。 |
| 保護者支援 | <ul style="list-style-type: none"> ・実習生の記録に「保護者に寄り添いつつ」とあるが、詳しい説明が必要。 |

今後の検討課題・連携、事後指導は、計14 descriptionが挙げられた。description数が少ないため、codingは不要と判断した。Table 8に、今後の検討課題・連携、事後指導のdescription例を示す。

Table 8 今後の検討課題・連携、事後指導description例

| | description例 |
|---------|--|
| 事後指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・知的障害特別支援学校における教材研究、授業の進め方について、事後指導において、具体的なレポート作成を課す必要がある。 ・自立活動、生活単元学習について、事後指導において、具体的なレポート作成を課す必要がある。 |
| 今後の検討課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・実習中、個々（様々な実態に応じた）の子どもに対する言葉掛けの具体例を記録させることが必要である。 |
| ・連携 | <ul style="list-style-type: none"> ・指導教員による指導・助言について、参考になる内容を纏めておく（コピーして保存）必要がある。 |

以上、生成されたcodeの何れもが、担当者3名により指導している内容であるが、今後はさらに意識して指導すべき事項として捉える必要がある。

Figure 8に、教育実習指導の課題、指導で意識すべき事項としてAfter codingしたcodeを示す。

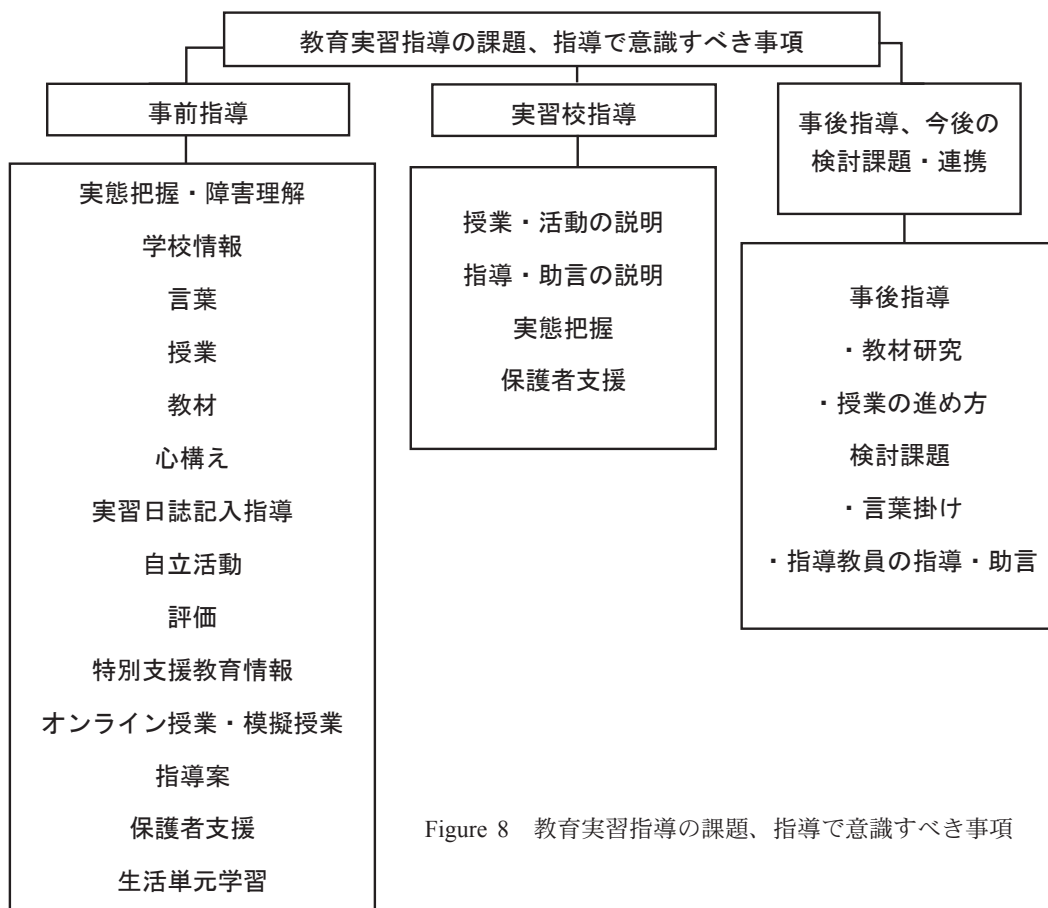


Figure 8 教育実習指導の課題、指導で意識すべき事項

6. 考察

教育実習生が記述した「観察・考察・反省（自己のふりかえりなど）」、指導教員からの「指導・助言」欄の記述内容（趣旨）を検討し、担当者3名の合議の基に、Category化した。その結果、教育実習指導上の重要事項として、「子ども・教員とのコミュニケーション（言葉掛け）、教材研究、文書表現、研究授業、学習指導、生活指導、子ども理解」が挙げられた。

また、教育実習生が記述した「観察・考察・反省（自己のふりかえりなど）」欄及び「指導教員からの指導・助言」欄の記述の主旨を踏まえ、教育実習指導に当たる課題、学生指導で意識すべきこと、及び教育実習指導における指導内容の視点等について検討した。その結果、①事前指導として、「実態把握・障害理解、学校情報、言葉、授業、教材、心構え、実習日誌記入指導、自立活動、評価、特別支援教育情報、オンライン授業・模擬授業、指導案、保護者支援、生活単元学習」、②実習校で指導を受けるべき事項として、「授業・活動の説明、指導・助言の説明、実態把握、保護者支援」、さらに、③事後指導、今後の検討課題・連携に関する事項も挙げられた。

これらにより、本研究の目的である「教育実習指導の事前・事後指導の課題」を明らかにした。これらの課題は同時に改善策を検討するための具体的資料として捉える。

以下、改善策として、特に、教育実習日誌、グループワーク、指導教員との連携、自己評価票の作成について考察する。

1. 教育実習日誌

特別支援学校での教育実習について、担当者が特に重視していることは、実態把握・障害理解である。坂本（2009）は、「指導教員は常に目標との関連で授業を見る傾向がうかがわれ、題材、教材、指導方法、児童の実態といった単独の項目で授業分析するのではなく、目標との関連で授業を見ている。」と述べている。

教育実習日誌の作成（記載内容）に関して、事前指導で扱っているが、実際に、実習生が学んだ実態把握の方法や障害理解の記述が十分とは言えない。実習期間に制限があるものの、実習の終了時には、特にこの観点からの記述が増えるように指導していく必要がある。また、実際の教育場面で、指導の意図を理解していなければ、実態把握・障害理解の記入は難しいため、実習校（指導教員）との有機的な連携が求められる。

2. グループワーク

教育実習の成果は、指導教員による指導・助言に依るところが大きいことが再確認された。指導教員は、子どもへの対応や指導案の作成のみならず、子どもの内面を理解した上での指導・支援を行っており、教育実習生に的確に指導意図を伝えようと努力されている。しかし、実習日誌からは、実習生が指導教員の考えを確実に理解し、記録として残しているかを確認することは難しい。「良かった、上手くできて嬉しい」「上手くいかなかった」という単純な視点での振り返りに止まり、実習生は自分の思うとおりに活動が流れるかどうかを気にしている実態が見られる。このため、指導記録の方法として、具体的場面を想定し、指導する必要がある。例えば、事前指導においてグループワークを行うことにより、活動選定の理由、子どもの実態からの整合性、指導のねらいや教材の妥当性等について議論を深めることが期待できる。

3. 指導教員との連携

Melba Spooner et.al (2008)は、長期間（1年間）のインターンシップに参加した実習生は、短期間（学期）の実習生よりも、指導教員との関係が良好になり、指導教員の意図をより正確に認識すると報告をした。また、Chris Kyriacou & Paul Stephens (1999)は、教育実習生の懸念として、真の教師と見なされていないことで、自信を持っていないことに陥る場合があるとして、指導教員は、学級経営（creating an orderly classroom）の下に、責任ある指導や実習生に対し自信を育む指導の必要性を報告している。

坂本（2009）は、『教育実習生は「授業展開」について学ぶことができたが、次の授業で活かせたと実

感するには至っていない。「授業展開」に関しては、指導教員の説明があって初めて理解され、活かした内容と言える』とし、『教育実習生は授業づくりの経験も、授業を行った経験もないのであるから、教育実習生が疑問や問題意識をもった内容に対して適切なアドバイスをしていく必要がある』と述べている。

本学の教育実習生にとって、特別支援学校という障害がある幼児児童生徒に対する実習経験は初めてのことである。彼らとのコミュニケーションに際して、障害についての知識は必ずしも必要ではないはずであるが、実際の学校現場で指導教員の影響（役割）は少なくないと思われる。森（2012）は、教師への信頼感が高い学生ほどポジティブな教師イメージを持つと述べている。

実習日誌からは、指導教員と実習生の関係性について、懸念される内容の記述が見当たらなかった。しかし、教育実習の心得として、社会人としての振る舞いや責任ある行動について指導を一層徹底する必要がある。同時に、大学から適宜、教育実習校の指導教員に対して、実習生の評価を求めることも必要と思われる。

4. 「自己評価」欄の設定

本学科では、特別支援学校教育実習終了後に、報告会を実施し、各教育実習生の経験を共有している。現在の実習日誌では、実習生自身による自己評価は、「観察・考察・反省（自己のふりかえりなど）」欄での記載にとどまっている。教育実習生の成果を自身で確認することはもとより、今後、教育実習指導の課題をさらに詳細に検討する上で、「自己評価」欄を設定することが重要と思われる。実習生にとっては、実習を終えた時点での評価ということで達成感が反映され、高い評価になることが予想される。このため、「自己評価」欄の設定に当たっては、より適切な構造にするために設問や回答の選択肢の検討が必要である。また、特別支援学校での教育実習ということから、子どもの実態・障害の把握やコミュニケーションに困難を感じるということが予想される。このため、「実習で困難を感じたこと」、「事前に学習しておきたかったこと」について自由記述欄を設ける必要がある。

更に、「学習指導（研究授業）」として、目標に応じた指導過程の構成、適切な言語活動、子どもの反応に対する応答、教室環境の設定（配慮）、板書計画等、「教材研究」として、教育課程及び年間指導計画の検討、単元設定理由の明確化等、「学校生活」として、子どもの実態（課題）把握、子どもとの関わり、「勤務態度」として、指導教員等との協働的なコミュニケーション（報告、連絡、相談）等の項目の設定を検討する必要がある。

結語

1. 本研究の限界として実習日誌の借用を得たのは19名、実習期間が短いものもあったため、全体的に十分な情報を得たとは言明しがたい。そのため、結果の解釈には限界がある。
2. 「5-1 記述内容のCategory化」及び「5-3 After codingによる教育実習指導の課題、指導で意識すべき事項」で挙げた事項は、これまでの実習指導においても取り上げてきたものであるが、今後は、指導内容の必然性や系統性を踏まえ指導計画に反映する必要がある。また、今般のように新型コロナウイルス感染症等の予測困難な事態に対応すべく、指導内容の更なる精選（副次カリキュラムの作成）が必要である。
3. Codingした事項は、現在の教育実習指導においても行われているものであるが、重要視すべきことが示された。今後は、指導事項の不足（不備）を点検・検証し、具体的な指導事項に組み入れる等の改善をする必要がある。また、教育実習指導を補完する方法として、他の特別支援教育科目の授業との関連からも検討する必要がある。
4. 障害種別による指導内容・方法の共通点、相違点については、サンプリング数が少ないために検出することは困難であった。しかし、幼稚園実習、保育所実習など、他の実習へ汎化できる指導事項はあると考えられ、子ども教育学科内で情報共有する必要がある。
5. 教育実習日誌から教育実習指導の課題や改善点を検討する資料とした。今後は教育実習生にとって、自己の課題や成果を具体的に確認できるようにするため、教育実習日誌の構成を改善する必要がある。

謝辞

本研究に当たり、2021年度特別支援学校教育実習受講生19名より、教育実習日誌を借用し、調査データとして貴重な情報を得ることができました。記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) Chris Kyriacou & Paul Stephens, Student Teachers' Concerns During Teaching Practice, Evaluation & Research in Education, Volume 13, P18-31, 1999
- 2) 中央教育審議会, 今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申), 2006
- 3) Melba Spooner et.al., Is More Really Better? Examining Perceived Benefits of an Extended Student Teaching Experience, The Clearing House: A Journal of Educational Strategies, Issues and Ideas, Volume 81, Issue 6, P 263-270, 2008
- 4) 坂本学 他, 特別支援学校小学部での教育実習における教育実習生に対する指導内容- 指導案指導と授業反省会を通して-, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 第29号, P47-53, 2009
- 5) 伴光明 他, 資料 特別支援学校(知的障害)教員のコミュニケーション指導に関する意識調査, 特殊教育学, 49(1), P31-39, 2011
- 6) 森 敏昭 他, 教職志望学生の教職意識と小学校時代における教師からの被教育体験への認知との関係: 学部1年生と3年生の差異に着目して, 日本教育工学会論文誌 35 (4), 345-356, 2012
- 7) 池田浩明 他, 特別支援学校の教育実習における学生の意識について(2)期待・不安及び意見・要望に関するアンケート調査から 一, 藤女子大学人間生活学部紀要, 第50号, P95-102, 2013
- 8) 阿部正一 他., 特別支援学校における生徒指導の実践動向と今日的課題, 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究, 第9号, 通巻31号, 2014
- 9) 樽木靖夫, 教育実習報告会についての話し合い活動, 帝京科学大学紀要, Vol.11, P129-135, 2015
- 10) 渡邊駿太 他, 日本における教師効力感に関する研究の動向と展望, 三重大学教育学研究紀要, 第68巻, P 245-254, 2017
- 11) 中村明美 他, 特別支援学校教育実習指導の提言と展望, 武庫川女子大学学校教育センター年報, 第3号, P 23-32, 2018
- 12) 文科省 総合教育政策局教育人材政策課, 新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた教育実習・介護等体験の代替措置等について, 2020
- 13) 教育相談スタッフ 特別支援教育セクション, 自立活動ってなんだろう? ver. 2, 島根県教育センター, 2021
- 14) 平野博紀, 教育実習の意義や実施状況について, 文部科学省総合教育政策局教育人材政策課, 第36回 大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関DXシンポ」, 2021
- 15) 今野邦彦 他, コロナ禍における特別支援学校教育実習指導の課題, 藤女子大学人間生活学部紀要, 第58号, P 73-83, 2022